

学びの場の「コミュニケーション」

未来に生きる学びの場

学校にしかできない学び、学校の外でこそできる学び、学びの場＝学校とは限らない。
子どもたちの学びたい気持ちを、さまざまな場につなげ、
さまざまな場で受けとめること、そんなやりとりが必要とされている。
「見せる」「見守る」「見通す」を通して、未来に生きる子どもたちの学びの場を支えよう。

中間 真一 HRI 社会研究部 主任研究員

これほど「コミュニケーション」という言葉を見聞きするようになったのは、いつ頃からだろう。80年代前半のニューメディアや90年代のマルチメディアブーム、IT革命が話題となった2000年沖縄サミット等と同期して、新聞記事の掲出頻度は増加。こうした表舞台の「コミュニケーション」は、IT（情報技術）の勢いとともに社会の中で勢いを増してきた。

一方では社会や生活の問題として「コミュニケーション」が話題となることも増えている。人々の価値観や暮らし方は、多様化、個別化が進み、格差も増すばかり。社会や経済では、グローバル化、複雑化、原理主義化が進む。その中で、これまでは権威のもとに一方的な強い力を持っていたは

ずの政治や行政、病院、大学、企業、そして科学やアートの世界でも「コミュニケーション問題」に関心が集まっている。そして、揺らぎ続ける教育問題の渦中でも、学びの場のコミュニケーションが重要なテーマとなっている。

そこで、本号では子どもたちの学びの場とコミュニケーションをテーマに近未来の学びの場を考えてみた。まず冒頭では、学校という学びの場の現状が、果たして子どもたちのコミュニケーションを豊かにし、これからの生き方を考え、さまざまな交流を広げられる方向に向かっているのか、野田正彰氏から、批判的かつ実証的に問題状況を提示していただいた。

その上で、学校から離れ、科学、演劇、

美術の場に視野を転じ、それらの場に埋め込まれた学びとコミュニケーションの可能性について、現場体験から立ち上ってくる思いを3氏に語っていただいた。さらに、昨夏の「てら子屋」の実践をも振り返りつつ、コミュニケーションから発想する学びの場の転回を考えようとした。

学校という場にふさわしい学び

なぜ、「学校」という学びの場の中心から目を転じる必要があったのか？ 私たちが8年間続けてきている学びの実験的プログラム「てら子屋」も、学校という制約から解かれた先の周縁に、新たな学びの場の価値を見つるべく進めてきた。し



かし、私はイリイチのように「脱学校」を主張し、学校をなくすことを目指すべき社会像と見ているわけではない。学びの場の中心に、学校がありえる全体像を描けるような、学びの場の再デザインが必要だと感じている。

子どもたち、若者たちに必要な学びの場は、学校だけでは不十分だと、すでに多くの人が気づいている。学校という場で完結するに適した学びと、そうでない学びを整理し、学校という「学びの場の改革」と同時に、学校外の「学びの場の開拓」を進めなくてはならない。

では、学校という場の特性は何か。さまざまな見解があると思うが、従来の学校をほぼ前提としながら以下5項目を基本特性として挙げてみた。

- ① 教える側と、教えられる側が明らかに分かれて存在する場
 - ② 教える側と教えられる側が対面して進められる意図的な教授の場
 - ③ 習得させるべき知識や技能と、学習力リキウムを持った教師から、それらを持つていない生徒への教授の場
 - ④ 正しい知識を、簡単なものから複雑なものへと、確実に積み重ねていく場
 - ⑤ これらの知識と技能の伝達を、決められた時間内で効率的に行う場
- このような場は、「読み、書き、そろばん（計算）」のような基本的な知識や技能を習得するには適当だといえるだろう。

しかし、次代への学びは、それだけでは

不十分だ。効率よく正解に到達するよりも、自ら問題を設け、正解があるかどうかもわからない中を問題解決に取り組める知恵の価値が高まるポスト工業社会、知識や情報の量を追いかけたら切りがない高度情報社会、このような中で個々人には自律した生き方を求められている。「生きる力」は、先の特性を持つ学校という場だけからでは、学びきれない。

教育が目指すものからの発想

そもそも教育とは、何を目指したものなのか？それは、野田氏も指摘している通り、すでに教育基本法に簡潔にまとめられている。「教育は、人格の完成をめざし、平和的な国家及び社会の形成者として、真理と正義を愛し、個人の価値をたつとび、勤労と責任を重んじ、自主的精神に充ちた心身ともに健康な国民の育成を期して行われなければならない」という教育の目的は、「あらゆる機会に、あらゆる場所において実現されなければならない。この目的を達成するためには、学問の自由を尊重し、実際の生活に即し、自発的精神を養い、自他の敬愛と協力によって、文化の創造と発展に貢献するように努めなければならない」と方針づけられている。その上で、「これらを遂行するに必要な諸条件の整備確立を目標として行われなければならない」のが教育なのだ。法律制定後約60年を経てなお、私たちの

提案する近未来「自律社会」への方向にも適う内容ではないか。

この理念に立ち返れば、不確実な時代を生きる力の土台は、学校の授業で学ぶ確かな基礎知識と、学校の仲間たちとの遊びから育まれる、たくましく健康な心身にほかならない学校という学びの場の価値は、その一点で揺るがないはずだ。

しかし、その上に積み上げられるべき学びは、学校型の学びの延長上にある専門化、総合化した知識というよりは、個々の関心を核として、好奇心と行動力により加速され、さまざまな状況や環境へと伸びゆく自らの学びである。それは、一方的に教授されるだけではない。環境や状況の中でのやりとりから自らの意味を見出し、それを次のやりとりへの駆動力として、価値の再生産を高め深めていける学びの場といえよう。この「やりとり」こそ、「コミュニケーション」の意味するところではなからうか。

そして、そのような学びの場が備える要件を考えていくと、その結論は先に挙げた学校という場の特性を反転させたような特性にたどり着く。なぜなら、ここでいう環境や状況とは、物質的な環境というよりは、人と人、人と物が出会うことによりコトが創発される場を指すからだ。だから、創発の場を、従来の特性を残したままの学校現場に持ち込もうとすれば、機能不全をきたしてしまう。多くの公立小中学校で、総合的な学習の効果



が上がらないばかりか、学力低下や教師の質やモチベーションの低下まで引き起こし、その果てに一部の学校が、塾や予備校に教えや助けを乞う現状は、まさにそれゆえの惨状だ。決して、総合的な学習自体が悪いのではない。意味のあるやりとりができる状況と環境、すなわちコミュニケーションの場を、今まで通りの学校の場合に押し込むことに無理があったのだ。

学びの場でやりとりされる情報

では、学校が学校らしく基礎知識、基礎体力、基礎社会力を育む拠点として再生を果たしたとして、もう一つの、これからはますます重要度を増すであろう学校外の学びの場は、どこに求めるのが望ましいのだろうか。私は、それをITによるバーチャルな場に頼りすぎてはならないと考える。

今や私たちは、インターネットの検索エンジンから容易に膨大な情報の海に入れる。たとえば、googleの日本語ページで「学びの場」を検索すると、瞬時に30万件を越すサイトがリストされる。果たして、そのような情報にアクセスし続けることが、好奇心にもとづいて環境との関係性を拡げていく創発の場を生んでいくことになるだろうか。瞬時にリストされる膨大なサイトを一つ一つクリックし続ける姿は、人間がITの奴隷かロボットと化したかのように。決して豊かな未来ではない。

情報学者の西垣通氏は、著書で「情報とは生物にとつての意味作用」であり、「生物が生きる上で意味のあるもの、重要なもの、価値があるものに他ならない」と指摘している。また、私はこれまでの「てら子屋」で、子どもたちが学んでいく姿から、その人にとってリアルティのある情報だけが、役に立つ知識として、その後さらに発展するやりとりの糧となっていると感じていた。自らのこれまでの経験を振り返っても同様だ。身体全体で感じ取り、心身に染み込むような感触を得られた情報が、経験となり情報として積層される。そのような情報は、概して意図的かつ自動的には生成されなかった。短時間で高効率で生成されるものでもなかった。多くの寄り道をしながら、あちこちにつかりながら、その場その場でのリアルティに素直に対面し、意味や感情の「やりとり」を重ねながら進んでいった結果、出来上がった。

学び取るための自分の網を持つ

昨夏のてら子屋のテーマは、「地球をみる、宇宙をみる——地球の歴史を掘り起こし、輝く星に宇宙を仰ぐ」とした。足もとの地面からたどって、太古の生き物たちを訪ねた先に宇宙を仰ごうという、地学分野を中心とした学びの目論見だ。

果たして、これが参加した小中学生の子どもたちに、どのくらい伝わり、学び取



られただろうか。プログラムの成果は、そこで問われる。基礎的な知識獲得を目的とした(学校の場)学びならば、事後テストをすれば効果測定できるかもしれない。

しかし、学校から出て、その環境から自ら学び取ろうとする場においては、大人の都合でつくった網で、子どもたちの心の中から成果をすくい取ろうとしても無駄であろう。小学校高学年ともなると、自ら面白さを見つけられる子どもらしい子どもたちは、しっかりと自分の網を備えている。それを使つて、学びたいものを捕らえようとしている。現場にいると、それがよくわかる。自分の好奇心と関心、面白さによって異なるそれぞれの

網は、知識の難易度別の網とは違うのだ。そういう網を持った子どもたちは、大人の目からは、本題から逸れて遊んでいるようにしか見えない場合も多い。しかし、最終的にはちゃんと本題に戻るどころか、専門の研究者もドキッとするような本質的な質問を投げかけてきたりする。今回の指導スタッフもこの点を指摘していた。だから、学校の外の学びでは、詳細な積み上げのカリキュラムではなく、「骨格となる学びの目論見」こそ、入念に検討されるべきなのだ。それこそ、その場その場の偶然的リアルティから引き起こされる、学校を離れた学びの場のコミュニケーション要件の一つだ。

本物の大人だから担える三つの役割

では、詳細な積み上げプログラムの必要がないとすると、学びの場のコミュニケーションにおいて子どもたちと対面する大人たちの役割はなくなってしまうのだろうか。まったくそんなことはない。私は、知識と経験の豊かな大人として、子どもに「見せる」こと、子どもたちを「見守る」こと、その上で場の「見通しをつける」こと、この3点に大きな役割があると確信している。

子どもたちの、本物と偽物を見分ける眼力には、いつも驚かされ脅かされる。大人は、その人の所属や肩書き、経歴、言説で容易に騙されるが、子どもはそうはい

かない。だから、私がてら子屋のプログラムづくりで最も留意するのは「人」だ。学びの場のコミュニケーションには、本物の人、本物の場を選ぶ必要がある。そして、たいてい本物の場には、本物の人がいる。今回のてら子屋では、はるばる北海道中川町に出かけた。そして化石発掘の当日、子どもたちのために駆けつけてくれたのが、町のベテラン化石愛好家の西野さんだ。その出で立ちは、化石発掘で山に入るための完全装備でとても格好良い。子どもたちは、すぐに西野さんを「名人」と呼び始め、名人が黙々と化石を探し始める様子をそばで見つめる。決して、子どもたちに「まず、見てなさい」と言っているわけではない。皆、勝手に崖をほじくり返し

ながら、しかし名人を見ている。何を探せばいいのか、どのように掘ればいいのか、理屈よりも見て学んでいる。そこから次第に、名人とのやりとりを重ね、自分の掘り方を見つけ、ノジュールを割った中からアモンナイトを見つけ始める。過剰な言葉や情報の押しつけは必要ない、見て、真似て、自分に取り込んでいくコミュニケーションだ。このやりとりは、偽物からは生まれない。

次に「見守る」ということがある。子どもたちの好奇心や関心は、野外に出て縦横無尽に解放される。しかし、野外ならではの危険もある。どこまで子どもたちの本能的野性の解放を許せるか、そのぎりぎりの線を判断して見守れることが、彼らのコミュニケーションの成否を決めてしまう。それを誤れば、危険に遭ったり、がんじがらめの窮屈でつまらない場になってしまう。

このように、見せて、見守れるコミュニケーションの場づくりから、その場を通したやりとりの行方を「見通す」ことによつて、子どもたちの学びを支えていくこと、これがそが重要なのだ。

そして、このような場が生成されるとき、不思議なことに大人と子どもは、互いに面白がる、互いに引き出し合える関係となつている。座談会やスタッフの感想でも「子どもたちに乗せられて、ついつい専門的な話にまで熱が入った」とか、「元気をもらった」という発言があったが、このよ

うな関係こそ、学校から離れた学びの場での、大人と子どもの双方向のやりとりといえるのではなからうか。決して、互いになれ合いの関係になることではない。そして、情報の交換というよりは、場を通した交歓に近いものだ。

響き合い、絡み合うやりとり

人間は、意味だけでなく、意味と感情が伴ったやりとりを交わす中から、互いに支え合い、行動を起こすようだ。相手の経験にもとづく世界と、自分の経験の世界を絡み合わせ文脈をつくつて経験として染み込ませていくことこそ、コミュニケーションといえるかもしれない。しかし、その結び目をほどこいてはまた絡ませる繰り返しは、それが互いに面白くなければ続かないはずだ。だからこそ、このような場は、本物のモノと人が集積されているミュージアムや大自然の中で生成されやすいのだろう。

変化の先に自律した人々による社会があるのなら、まさにこのようなコミュニケーションを重ねていく学びこそ、生きる力を育むものになるだろう。そして、学校という学びの場と、学校の外の学びの場を織り込んでいく織り手こそ、これからますます必要とされるはずだ。

学びの場のコミュニケーションは、響き合いであり絡み合いであり、間合いであり気合いなのだと感じつつある。

